タイ映画『バッド・ジーニアス——危険な天才たち』とカンニング

ヒロインは聖女か悪女か

平松 秀樹

『バッド・ジーニアス——危険な天才たち』(2017年)は本邦でも劇場公開され、それまでのタイ映画に見られなかったサスペンス調の手法と新奇な内容が評判を呼び、東南アジア映画としては異例の日本国内ヒットを成し遂げた。劇場やその他の上映会、あるいはDVDやオンライン・メディア等で鑑賞した人も多いだろう。高校生のヒロインによる、最初は単に親友を助けるために試験中にこっそり解答を教えるだけであった不正行為がどんどんエスカレートしていき、STIC[1)]という国際的な試験での大規模カンニング作戦にまで発展する。途中やめるチャンスは何回かあったものの、悪の誘惑を断ち切れず、ヒロインは自らも深く関与していく。この映画を鑑賞した人の感想としては、概ね、ヒロインのカンニング行為は絶対的に悪いものの、もう一面では彼女が大人社会の不正と闘っている姿も見え、その葛藤の中で「頑張った」とヒロインにエールを送りたくなるというものだろう。

1. タイ社会の現実を反映しつつも論のすり替えに支えられたヒロインの正義

本稿ではまず、意に反して大規模カンニング作戦に巻き込まれた挙句、やがては身動きが取れなくなり破滅していく男性登場人物のバンク(Bank)[2)]や彼の母の立場からこの映画を考察してみたい。

彼らから見たヒロインはかなりの「悪女」である。バンクは、ヒロインのリンラダー(愛称リン)を守ろうとして、善意から校内試験[3)]でのカンニングを告発した。眼鏡を掛けたドングリ頭のバンチョンが試験中にリンの答案解答を盗み見ようとしているとバンクが勘違いしたことによる。バンクはリンにも「カンニングされているので注意するように」と告げている。バンクは彼女が積極的に関わっているとはつゆほども思ってもいなかった。バンクが告発したために不正行為が校長に知られることとなり、結果的にリンは高校の授業料免除特待生資格およびシンガポール政府による大学奨学金の応募資格を剥奪されることになる。

リンのシンガポール奨学金の応募資格が失われ、学校にあてがわれた奨学生の椅子は一つであるため、自動的にもう一人の候補であったバンクに決定することになる。しかし、そう簡単にはことは終りを結ばない。リンの軽口のせいでバンクはとんでもないことになる。オーストラリアまで出かけて行って時差を利用するSTIC大規模カンニング作戦の実行のためには、リンが自分一人だけでは携帯電話のLineメッセージにすべての解答を打ち込む休憩時間が短すぎ[4)]、もう一人の「天才」が必要だと友人のグレースやグレースのボーイフレンドのパットに口走ったため、シンガポール奨学金の試験の前日、バンクは路上で暴漢に襲われて半殺しの目に遭う。彼のシンガポール行きを阻止してカンニング作戦の仲間に引き入れるためである。バンクは暴行を受けた後、ごみ集積場のまるで丘のようなごみ山の中に遺棄(廃棄)される。善意が必ずしも良い結果に結びつくとは限らないのが世の常であるが、バンクがリンに対して行った善意の「報酬」として得た不利益はあまりに大きい。

もちろんヒロインのリンはそのような暴力的なこ

1)この映画は、SATという国際試験で中国人グループが組織的カンニングを行った実話から着想を得ている。

2)後述のように計算能力が高く、そのためにニックネームがBank(銀行)なのであろうか。

3)この試験は、教室ではなく体育館のような場所に机を並べて、かなりの人数で行われている。

4)100以上の項目すべてを暗記できるくらいの天才ぶりをパットは「X-MENのようだ」と言っている。

とをする人間ではない。グレースの彼氏であり大規模カンニング作戦の依頼者、かつその他大勢の顧客をも招集するビッグ・クライアントである大富豪の御曹司パットが勝手に暴漢を雇ったのである。しかしながら、たとえ直接関わっていなくても、リンが「この作戦はもう一人いなければ実行不可能よ。たぶん彼はうんとは言わないだろうけど」などと思わせぶりなことをその大金持ちのドラ息子の前で軽々しく口にしなければ、バンクは心にも体にも大打撃を負うことはなかった。

奨学金試験日の前夜に襲われたバンクは入院して試験を受けることができない。奨学金による大学留学の夢が途絶えた彼に、さらに、言葉は悪いが獲物のまわりを旋回するハゲワシのように、いや弱者につけよるハイエナのように、黒い影が近寄ってくる。暴行した黒幕の正体を知らぬまま、のこのことバンクを見舞いに行ったリンは、彼がカンニングを告発したことにより自分の特待生および留学資格が剥奪されたことを盾にとって、その責任を取れと大規模カンニング作戦という悪の道に誘い込む。バンクにとっては真綿で首を絞められるような感じだ。バンクは退路を断たれ、後戻りができなくなる。結果、オーストラリアのシドニーまでリンと一緒に出張してカンニング作戦を手伝うことになる。ところが、彼一人だけがカンニングを見付かってしまい、在シドニー・タイ大使館の係官により高校に報告され、退学処分を受ける。

リンも危うく捕まるところだったが、何とか逃れた。バンクへの重い処分とは対照的に、リンは試験の途中で会場を出たことによる答案点数の無効という極めて軽い処分である。タイからわざわざ二人で来ているにもかかわらず、リンが共謀を当局から疑われることはないようで、後を追った係員によって試験会場に連れ戻されているが、リンが尋問を受けている様子はない。不正の嫌疑はバンク一人だけにかけられている。

その後、黒とダークオレンジ色のボーダーシャツを着たヒロインがバンクのSTIC不正について証言インタビューで語っている場面が差し込まれている（場所はタイと思われる）。リンはバンクが不正を行うような人間ではないとの証言を、しらじらしく当局にしている。証言インタビューの部屋で、まるで合わせ鏡のように何重にも写っている彼女は、どれが本当の姿かわからない。まるで騙し絵のようだ[5]。

一方、校長の威圧感のある豪華な机の前で退学同意書にサインするバンクの母親の気持ちはいかなるものであろう。母親の商売は町の小さな洗濯屋で、洗濯機が壊れても新しい機械が買えず手で洗っている姿が劇中で描かれる。機械だけでなく、母の身体もぼろぼろのようだ。日本語字幕[6]では字数制限のためか、母は「猫背」と訳されているが、そうではない。日々の重労働のせいで背中が曲がっているのだ。日本的にいえば腰が曲がってしまっているのである。

バンクとは二人だけの母子家庭だ。バンクは少しでも母を楽にさせようと、放課後は一生懸命に洗濯物を手洗いして母の仕事を手伝っている。そんな二人にとって唯一の希望は、バンクが海外に留学して明るい未来を勝ち取ることである。息子も、自分の夢は留学して将来母を楽にしてあげることだと言っている。そんな貧しい一家の夢さえヒロインは無残に奪い取ってしまった。最後の望みまで絶たれて、校長の前で何の反論もせずにただ黙って下を向く、もの静かな性格の母親の悲しみの前では、ヒロインのいかなる言い訳もただの空虚で騒々しい囀りにしか聞こえない。彼女のいかなる理屈（屁理屈）も、黙ってそっと涙をぬぐうバンクの母の姿の前では無効化されるだろう。

5）リンだけではなく、タイでカンニングした人たちも誰一人として処分を受けていない。バンクはいったいどんな供述をして自分一人の処分になったのだろうか。トイレで携帯電話を不正使用したことが捕まった原因なので、データが消去されていても通信会社を通して内容や送信先を追跡するのは簡単であろう。また、今回だけタイで超高得点者が異常に多いことと照らし合わせれば、すぐに摘発できたはずだ。彼らは「俺たちはSTICで1460点とった！」とプリントしたお揃いの記念Tシャツを着て派手にパーティまでしている。当局は、バンク個人が自分のテスト点数を上げるためだけに不正をしたと判断して、それ以上調べなかったのだろうか。黒とダークオレンジのシャツを着たリンの証言インタビューでも、リンは自分はカンニングしなくてもいい点をとる実力があるのでバンクの不正に関与していないと言っている。

試験には記述式の小論文もあり、リンたちは題目とキーワードを教えただけなのにタイ側でカンニングした生徒全員が同じ点数である。全員同じ内容の記述解答であればさすがに当局も不審に思い不正の調査をするであろう。STICの小論文（essay）の論題はノース・マンデラの「Lighting Your Way to a Better Future」である。いかにして教育によって明るい未来を築くかという内容の小論文試験でカンニングが実行される皮肉が強烈に効いている。

6）本論の考察にあたっては日本語字幕版DVD（マクザム、2019）を使用した。

ここでヒロイン側の理屈を整理しておこう。ヒロインにとっては、最初のカンニング[7]のきっかけは友達を助けるためであった。高校入学[8]の際に学校での証明写真の撮影時に親切にしてくれた、学籍が連番のグレースを救うためである。容姿端麗だが学業成績が芳しくない女優志望のグレースは、高校の方針が変わり一定の成績をクリアしないと大好きな芝居に出られなくなってしまった。彼女は特に数学を苦手としている。ヒロインの、この時点での不正行為の動機は、あくまで窮地に陥った天真爛漫な性格の友人であるグレースを救済することであり[9]、いわばティーン・エージ的な友情の証ともいえる。ヒロインにはあまり悪いことをしたという認識はないようである。そこには、困っている友達を助けて何が悪いのかという若者流の論理、ティーン世代にとっての「大義名分」が見え隠れする[10]。

本当は規則では退学のところだが、今回は大目にみて特待生[11]から外すだけにすると言った校長が話を続けて、学校はお金を稼ぐところではなく勉強にいそしむ場所だとリンを諭す。リンは小ばかにしたようなうす笑いを口元に浮かべ、この高校だって自分の父親から「ペ・チィア」(「賄賂」แป๊ะเจี๊ยะ[12])をとって儲けているではないかと強い口調で反論する。リンはいつもはクールな顔をしているのに、感情的になっている様子を見せる。ティーンによくあるように、大人社会の狡猾さがとても不潔に思えて許せないのだろうか[13]。校長は、あれは「賄賂」ではなく学校の施設維持費だと答える。維持費は授業料に含まれているのではないのかと反論するリン。校長に留学応募資格も取り消されて、彼女はますます激昂する。

シンガポール政府からの奨学金の夢が断たれて怒りが収まらないリンは、カンニングによって自分が大学留学の奨学金候補の資格を剥奪されることに納得がいかない。人に解答を盗ませてあげたのは事実だが、自分は誰の解答も盗んでいない、自分の成績は自らの努力と能力の結晶だと校長に言う。すなわち、カンニングさせてあげただけで、自分がカンニングしたわけではないと主張している。彼女の言いたいことをさらに代弁するならば、自分がここまで積み上げてきた高いグレードの成績は他ならぬ自分の努力と能力のたまもので、ずるをして積み上げたものではない。

「自分の実力は正真正銘のものだ。自分がずるをしたわけでもないのに、人に解答を教えてあげたというだけで、大学の奨学金候補の資格を取り上げられるのはおかしい。不本意だ」と真顔で主張するヒロイン役のオークベップ(愛称)の演技は、とても初主演

7)最初のカンニング方法は、教室で消しゴムに細かい字をたくさん書き込んで解答を渡すといった「原始的」なカンニング方法である。解答はすべて4択のマークシート形式である。

8)この学校の名は「クルンテープ・タウィー・パンヤー」(バンコク育智学園)。パンヤーはもともと仏教用語で智慧(般若)を意味する。校名もそうだが、「善行を積めば、智の花開く」と男性の声で歌われる校歌も痛烈な風刺に聞こえる。本編では隠し味として処々の箇所でピリリとした皮肉が効いている。

9)最初は金銭の授受はない。既に述べたように数学の試験中に突発的にグレースを「消しゴム」で助けただけである。消しゴムのおかげでGPAが3.87に跳ね上がった時のグレースのなんともいえぬ笑顔は、まるで逆上がりのできない子が突然ウルトラCを決めたかのような表情だ。悪いことをしておいて、何とも無邪気に見える。しかし事態は、グレースが恋人のパットにそのことを漏らしたことで、金銭を伴うカンニング商売へと急転回する。

10)よく言われるが、過度の自己肯定、偏った価値観、自分の立場からしか見ない一義的な正義感をティーン世代の特徴の一つとして挙げることができるかもしれない。また、姉御的なリンが頼りないグレースを見捨てられない姿はシスターフッド的でもある。

ティーンに限らず、タイでは、同一グループの仲間は絶対的に大切にする。立場が対等の場合は相互扶助、上下であれば親分子分の関係で面倒をみる社会である。最初のカンニングも、シドニーでのSTICカンニング作戦も、根本にある動機は「仲間」のグレースを助けるためである。

11)リンは、彼女の才能を見込んだ校長の一存で授業料免除の特待生となっていた。ランチも校長の配慮で通年無料というおまけつきである。校長はリンに十分過ぎる恩情を示していた。

12)字幕に倣って便宜上「賄賂」としているが、「ペ・チィア」は怪しげな寄付金、礼金というニュアンスのタイ語で、賄賂と通常訳されるタイ語の言葉は別に存在する。ここでの「ペ・チィア」は、施設維持費として高校から正式に20万バーツの領収書が発行されているので「裏金」とも訳せない。しかしながら施設維持費としての実態は定かでない。

13)グレースも参加しているプライベートレッスンを副業でしている同じ高校の数学教師が自分の生徒たちだけに本番の試験問題と全く同じ練習問題を与えていたのを知ってショックを受けていたことも、リンの大人社会への不信の一因になっていると考えられる。

タイで学校の教師や大学生に、家庭教師をしてもらっている高校生は多い。ただし、日本と違って自宅で教えるのではなく、たいていは混んでいないフードコートなどが利用される。空いている席に陣取って、学校の教師と思われる人が複数の生徒に教えていたりする光景をしばしば見かける。スターバックスなどでも大学生が中高生にチューターをしている姿をよく目にする。塾通いも都市部では多い。よく映画の舞台にもなるサイアム・スクエア周辺地区に塾が集中しており、いかに優秀な教授陣を揃えているかという大きなポスターが貼り出されているのが目に入ってくる。

とは思えない[14]。この演技力に釣られてか、大半の視聴者は、ここでヒロインに肩入れして、校長に代表される大人社会の腐敗や狡猾さを一緒に糾弾したい心境になることだろう。冷静に考えれば校長はおかしなことは言っておらず、退学や停学にならないだけでも随分ましなはずである。ヒロインのリンは、こうした論理のすり替えを得意とする[15]。例を挙げよう。

彼女がオーストラリア行きをバンクに迫る場面で説くところによれば、「不正」(コーン[กง])[16]とは、損する側があって初めて成り立つ行為である。彼女がこれからする行為はwin＆winで、みんなはいい点数を得て自分はお金が入るのだから、まさに損する人はいない。よって、不正(コーン)ではない。しかしここは、同じ「天才」であるバンクもリンの議論を理解していない。リンのような「天才」思考になり切れないところがバンクの弱さであり、それゆえこの世間でリンより苦しまなければならないゆえんであろう。彼は緊張すると嘔吐する習性があるほどデリケートだ。純粋な彼は、もともと不正などできない体質なのだ。彼には、リンの言うような「こっちが騙さなきゃ、逆に世間に騙されるだけよ」というふてぶてしさはないのである[17]。

リンは家に帰って父親に貯金通帳[18]を見られ、カンニングで稼いだ金のことで口論になる。こんなことをせずにまじめに勉強を教えて稼いだらどうだという父親に、校長も賄賂で稼いでいる(のだから何が悪い)とリンはしつこく答える。あれは「賄賂」などではなく[19]、喜んで出してくれたお金だと説明する父親。それに対してヒロインは、「友人たちも喜んでお金を出してくれている」と返す。これでは双方の会話は成り立つまい。父親はもはやお手上げ状態で、娘がカンニングにより手に入れた金で買ってくれたことが分かったシャツを脱ぎ捨てる。

ヒロインの論理を要約しておこう。それは、「友を助けることは正義である。それで得られた報酬が汚いというなら、そうした報酬で成り立っている大人社会はもっと汚い。それならタイ社会も学校も不正だらけだ。自分の受け取ったお金は大人社会の汚い賄賂とは異なる。百歩譲って、たとえ対価として友達から金銭を受け取ることが悪いことだと認めたとしても、友人たちに無理やり要求しているのではなく、友人たちは喜んでお礼として出してくれているのだ。だから何が悪い」というものである。

2.『バッドジーニアス』にみる タイの親子・家族・友人関係

リンの家庭は、バンクと反対で、父親と二人の父子家庭である。父の職業は教師で、どうやらリンの新しい高校の校長とも知り合いのようだ。リンが校長に反論する場面では、堂々とした娘の姿と対照的に、呼び出されて横にいる父親はおどおどするばかりだ。この私立ミッション系のエリート校への転校は父の願いである。リンは以前の平凡な学校のほうが幸せだったと言っている[20]。転校には納得していないようだ[21]。

しかし内心ではそう思っても、タイでは子は親に逆らえない。親が願うのならその期待に添うように努力するのが子の務めだ。そうでないと親不孝(ア・ガタンユー)というレッテルを貼られる。きっかけはグレースを助けるためだが、リンがカンニングに深く関与していくようになったのは、お金を得ること

14)カンニングの最中にシャープペンシルの芯がなくなるシーンも臨場感たっぷりで、まさに観る者に手に汗握らせる迫真の演技だ。彼女はのちにカンヌ国際映画祭に呼ばれてレッドカーペットを歩いた。

15)この論理のすり替えによって、カンニングという「悪いこと」をしているにもかかわらず、鑑賞者の多くが主人公のヒロインを応援して、彼女の成功を願ってしまう心理になる。

16)「コーン」は、ずるい、ごまかす、不正するという意味。英語だとcheat。この文脈では、「不正」として映画の日本語字幕に合わせた。映画のタイ語原題は「チャラート・ゲーム・コーン」で、「賢い・ゲーム・ずるい」という意味である。

17)主演のオークベップは、ふてぶてしい顔の表情がなんとも見事で、リアル感抜群である。また、無事にカンニングという大仕事が終了して、校舎前の階段でヤー・ドムという気分を爽快にする嗅ぎ薬を鼻にあてて嗅ぎながら、グレースに頭をマッサージしてもらっているリンのリラックスした表情もとても印象的である。

18)892,000バーツの記載がある。1バーツは現在約3.5円。

19)グレースの家は成績不良のためリンの2倍の40万バーツを↗払ったらしい。パットの家はiMac20台を図書館に寄付したといっているので、これは施設費としての寄付金になっている。すくなくともヒロインが糾弾するような校長のポケットマネーにはなっていない。

20)リンの父親はその学校の教師で、父の車で一緒に通っていた。

21)タイは中高一貫が基本なので、高校からの転校は一般的ではない。グレースたちは下からそのまま進学してきている。ちなみにリンの高校入学は2557年(西暦2014年)となっている。カンニングに手を染めるのは高2になってからである。

で少しでも父親の負担を減らそうと思ったからだ[22]。

すでに述べたように、最初は伝統的と言える「消しゴム」カンニングだった。この時は無報酬で親友を救済した。不正をしてまでも親友を助けることになった成り行きとして、リンがグレースにせがまれて勉強を教えることになっていた経緯が挙げられる。「私はリン先生の最初の弟子」、「リン先生、リン先生」と猫なで声でグレースにおだてられて、リンはまんざらでもない表情を見せる。彼女は天才ゆえの孤独で、前の学校では他の生徒は誰も近づいて来なかったのかもしれない[23]。新しい学校で初めてできた親友に「先生」と言われて心地よさそうな顔が印象的だ。天才の矜持をくすぶったのであろうか。人生最初のカンニング報酬が23万４千バーツ[24]とは驚くべき金額である。

リンの家にはピアノがある。タイでは一般の家にピアノがあるのは珍しい[25]。ある時ピアノを弾く指の動きで、音楽コードを使ったカンニング方法を思いつく[26]。もしかすると、リンの母親がピアノ教師だったのだろうか。劇中で離婚証明書をみつめるリンの姿が映し出され、両親が離婚していることがわかる。

母親が出て行った原因はわからない。リンが自分に転校を強いた理由を父親に尋ねた際に「この学校は奨学金を得て留学する生徒が多いから、いい機会を与えてやりたかった」と答えたのに対して、「私は母さんとは違うのよ」と言う場面がある。この意味を二通りで解釈してみよう。母親はピアノの先生で夫と職場結婚したが、夫が亭主関白で意見を押し付けて何でも自分の思い通りにさせようとするので、それに嫌気がさして離婚した。娘の親権も夫が主張したので諦めてやむなく一人で実家に帰った（とすると、リンの言葉の意味は、母のようには何でも父の思い通りにはいかないという意思表示となる）。あるいは、母親はピアノを弾く環境のある良い家庭で育ったお嬢さんで、留学経験もあるが、一時の気の迷いでリンの父親に惚れてしまい、若気の至りで結婚したものの、甲斐性のない夫を見限り娘を捨てて他の男性の元に走った（この場合は、母と違って自分には過分の野心や向上心はないという意思表示となる）[27]。

タイの社会を考えると、二つとも十分ありうる。妻が去った理由がどうであるにせよ、タイでは離婚が多いのは事実だ。その原因が浮気であることも多いようだ。妻がいようと夫がいようと「（新しい人を）好きになったものは仕方ない。すべては前世の業による縁なので、その業に従うしかない。今生でできることは、その業が尽きてしまうのを待つだけだ」と考えるのが一般的思考のように見える。

リンは母の誕生日さえ気にしていない父親に内心では不満を抱いていて、父親に時として反抗的な姿勢を見せて衝突するものの、根本的には親思いで二人は仲の良い親子といえる。最後は父の胸に飛び込みオーストラリアでの不正を告白する。父も優しい表情で娘を温かく受けとめる[28]。リンのカンニング報酬での初収入のプレゼントも父へのシャツである[29]。途中、オーストラリアのヴィザ申請のための必要書類に、父親が娘の背中を土台にしてサインする場面がある。これはあまり日本では見慣れない光景だろ

22）お金に余裕のない父が前述の「ペ･チィア」に20万バーツも払っていたことを知ったことが決め手になって、リンは当初は躊躇していたパットからのカンニングの申し出を受ける決心をするに至る。倹約家の父から学校がもぎ取った「賄賂」への義憤がヒロインを間違った方向に進ませる強い要因となっている。結果、すでに述べたように「不正」を正当化するに至る。

23）リンが孤独であったのではないかということは、ドラ息子のパットからリンのような親友が欲しいといわれて嬉しそうな顔をするところからもうかがえる。しかし、欲しいのはただの友達でなく「消しゴム」を貸してくれる友達だと言われ、一瞬で落胆に変わる。

24）１人３千バーツ（１万円強）×13科目×６名。

25）リンは左利きのためペンを左手で持ち、ピアノのカンニングコードを右手で弾く。

26）リンは前夜が誕生日だった母のことを憶いながらピアノを弾いているときにカンニングの方法を思いつく。母の思い出の詰まったピアノを弾いているときに、カンニングという不正のアイデアを思いつくとはなんとも皮肉である。

　ちなみに、カンニングに使う指の動作コードは、A（ก）は「エリーゼのために」（ベートーベン）、B（ข）は「トルコ行進曲」（モーツァルト）、C（ค）は「ピアノ・ソナタ第11番イ長調（トルコ行進曲付き）第一楽章」（モーツァルト）、D（ง）は「メヌエット」（クリスティアン・ペツォールト）である。

27）主演のオークベップのインタビューによると、離婚の原因は妻が「一教師として現状に満足している夫に不満を持った」ためとしている。シネマトゥデイ（2018年11月13日）「天才少女役にどっぷり『バッド・ジーニアス』９頭身美女の素顔」https://www.cinematoday.jp/news/N0104877参照（2022年1月31日最終閲覧）。

28）タイ人は、文字通り親子の距離が近い。父と腕組はもちろんハグやほほにキスもする娘もいる。息子と母も同様である。

29）もちろんこの場合はブラックなお金で、ピアノのレッスン料と聞かされていた父はあとでそれを知り、先述のように怒って買ってもらったお気に入りのシャツを脱ぎ捨てる。リンは「クラシック音楽レッスン生募集」のビラさえ作って配布している。

う。車を洗浄中だったので書類の置き場がなかったとも考えられるが、それにしても親子が相当親しく映る。

しかし見方を変えると、この時点では、親子がまだ正面から向き合っていないことの暗示ともとれる。リンと父親はいくら親しく見えても、正面からではなく背中越しの関係でしかなかったのだ。最後にオーストラリアから帰った極度の緊張からの解放と自己反省がともなって、父の胸でカンニング不正を告白した時にはじめて親子間のわだかまりがとれ、真に正面から向き合ったといえる。それまでは、娘はこころの底からは父とストレートに向き合ってはいなかったのだ。

父は、二度も娘のカンニングを許し、娘のオーストラリア行きに関しても、内緒でボーイフレンドと一緒に行ったので連絡が付かないのではというグレースたちの虚偽の説明を容易に信じて、娘が彼氏と二人で帰ってくるのを楽しみにして空港まで出迎えに行くほどのお人よしだ。どんな時にも悲嘆にくれることなく、いつもひょうひょうとしている[30]。誠実ではあるものの、そんな能天気具合が災いして妻に愛想を尽かされたのかもしれないとも思わせる。

一方で、「ドラ息子」のパット[31]は、外ではやりたい放題だが家の両親の前では極度におとなしい。特に父親には絶対服従で、ノーとは言えない息子である。両親が留学しろといえば留学しなければいけない。反論の余地はない。留学のための試験をクリアしろと言われれば、どんな手を使ってでも合格点を取らなければいけない。実行の仕方は間違っていても、親の言いつけを素直に守る点は、ずいぶん「親孝行」な息子である。タイ映画では基本的に親に反抗的な子供が描かれることは少ない。自分と同じようにボストンの大学へ行けというと、パットはそれに従う。

父親は留学してビジネスで大成功しているようだ。Pattonホテルという息子の名のついた豪華なホテルを経営している。自宅もホテルの一部なのか隣接しているのか、豪華なプール付きだ。ボーイがパット個人のためにプールサイドでスパークリングなどのアルコール類が入ったカートを押して給仕している[32]。しかし仮にもボストン大学へ留学するだけの頭のある父親から、なぜ頭の悪い息子が生まれたのか。あるいは父親も金に物を言わせて裏口から入ったのか。タイの金持ちはたいてい代々金持ちだ。その一因として殆ど相続税がいらなかった社会システム構造がある[33]。

金持ちのもうひとつの重要な要素となっている海外留学は、伝統的に「リエン・ノーク」(洋行帰り）といって特権階級を形成する土台となってきた。自らのカンニング不正によってシンガポール政府の奨学生の夢が絶たれたあとも、リンは、パットとグレースの留学を助けるための大規模STICカンニングで得た報酬で自分も一緒にボストンに留学すると言い出している。タイの人々にとって、それほど海外留学は人生設計として魅力的なのである[34]。ただし、学位（最低でも学士号）を取得して来る留学であって、語学留学ではない。シンガポール政府奨学金も博士課程までの学費が保障されていた。タイでは最高峰のアナンダマヒドン奨学金のようにほとんど年限を問わず支給されるものもあるが、学位を取って帰ることが必須である[35]。

一方、グレースの両親は本作では姿を現さない。代わりに、経営している印刷所がカンニング大作戦の準備の場として現れる。「スー・トロン・パーニット」

30）おそらく落胆が大きすぎてしばらく立ち直れない状況であろうと思わせるバンクの母親とは対照的である。

31）パットを演じたのは『ホームステイ――ボクと僕の100日間』(2018）の主演俳優ジェームス・ティーラドン。本人はインタビューで『バッド・ジーニアス』のドラ息子役のほうが自分にとって適役でのびのび演じられていたと言っている。リンの父親役は、同じく『ホームステイ』で「管理人」の一人（医師の准教授）を演じた俳優。

32）タイの映画では、金持ちの高校生が車を運転したり酒を飲んだりするシーンがよく描かれる。

33）本映画の公開は2017年である。Credit swiss（クレディ・スイス証券株式会社）の位置付けでは、タイは2016年は世界3位、2018年は世界1位の格差社会で、人口の１％の富裕層(約50万人)が国の富の66.9%を保有している。以上のパンコクポストの記事データをそのまま引用して掲載している下記の2018年12月7日付けPJA NEWSは、さらに福澤諭吉の「学問のすゝめ」まで持ち出してタイの不平等問題を論じている。https://pattayaja.com/2018/12/07/1339/参照（2022年１月31日最終閲覧）。

34）初期の教室内での「ピアノコード」によるカンニングの最中、リンが答案用紙の余白に丸い地球を書き、USAの旗を書き込むシーンがある。これは何の暗示だろうか。リンはもともと密かにアメリカ留学を目指していたのであろうか。それとも、カンニングを通したアメリカ留学という不正に今後はまっていくという未来の予兆の演出であろうか。

35）学位を取ってくる留学が人生のステップアップに直結しているのは、かつての日本も同じあろう。しかしタイで学校の成績がそのまま就職や将来に関係する度合いは日本の比ではない。

（正直・商い）[36] 印刷所という看板が何回もアップで現れるが、何を意味しているのだろう。「正直商い」の場で、これからずるいカンニング作戦が行われる皮肉であることは理解できる。もう一つ気になるのは、この印刷所には、タイ・ワッタナー・パーニットという名門出版社そっくりの三丸ロゴが描かれていることである。三丸がマークシートの解答欄を連想させるパロディーとして表現されていることも分かる。しかし、仮に教育関係の研究書なども多く出している老舗の出版社がモデルだとすれば、それに対して批判しているのかエールを送っているのかは判別不能である。

グレースは澄んだ瞳をした、天然キャラが魅力的な女性だ[37]。悪意は一切ないが、したことが裏目に出てしまう存在として描かれている。学生証の写真を撮影する際にリンの写真うつりの世話をしてあげたことから仲良くなった。舞台で演技するのが生きがいで芝居好き。ドラ息子のパットを彼に持つため、リンを利用する結果となる。本人にはそのつもりはなくても、グレースを起点として、事態がどんどん悪い方へスケールアップしていく。

シドニーへの出発当日、バンクが暴行された事件の黒幕がパットであることが発覚して、さすがにリンも激しく怒り、カンニング作戦が消滅しそうになる。グレースもグルなのかとリンに詰問されるが、事件はパットの単独行動で、彼女は知らなかったようだ。共謀しているのにしらを切り、芝居を打っている可能性もあるが、「計画はだめでもいい。一つだけお願い、私を怒らないで」、「あなたの半分も頭があればこんなことにはならなかった」と泣きながら言われてリンは怒りを収める。グレースのしおらしい姿を見れば、たとえ演技であったとしても怒気も鎮まり、異性同性を問わず彼女を抱きしめて庇護したくなる存在として描かれている[38]。

3. 二人の「天才」は並び立つか

リンもバンクも数学と暗記力が特に優れた超人的な天才である。リンは小さいころからずっとGPA４（オールA）で、数学で金メダル獲得[39] などの実績がある。バンクは学校代表としてリンと二人で出場したTeen Geniusというテレビのクイズ番組で、円周率を下々の桁まで暗記していて優勝の原動力となった。二人ともSTIC試験の全解答を覚えてしまうくらい暗記力が常人離れしている[40]。試験を全問正答したうえで、４択の解答番号を最初から最後まで暗記してしまうのだから、歴史上でも何人もいないであろう天才二人が、たまたま同じ時代・空間に同居していることになる。果たして両者は並び立つのだろうか。

リンはバンクに気があるようだ。高２の時のテレビ番組出演でのスタンバイの際にも、バンクの髪を直したりして色々おせっかいをする。グレースとのかかわり方を見ていても、彼女はお姉さんタイプだ。本映画にはロマンスは殆ど見られないものの、２回ほどわずかにスイートな場面がある。１回目はいま挙げた場面で、テレビ番組で優勝したら賞金で一緒にサーモン・ビュッフェを食べに行かないかとリンがバンクをさりげなく誘うシーンである[41]。

36）字幕では英語からの訳の「オネスト・コマース」印刷所となっている。実社会でも「正直」や「公正」などという言葉をこれ見よがしに強引に屋号に入れている会社ほど裏で何をしているか分からないという警鐘ともとれる。

37）高３になった最初のシーンで、ペプシを片手に笑顔を浮かべたグレースのカットが映る。タイ映画ではこうしたシーンはよく見られる。一例をあげれば、『レッドイーグル』（2010）では、スーパーヒーローが自分の傷ついた身体の血を止血する際に生理ナプキンを使用するカットでスポンサーのロゴが大きく映され、シーンの流れとして違和感をもつ人が多かった。

38）リンの帰国時、すでに帰国していたグレースはドンムアン空港にプラカードを持って迎えに行く。STICの成績が無効になったことをリンから聞かされても、早くもう一度試験を受けて一緒に留学しようというほど、どこまでも無邪気な性格である。

39）『ホームステイ』に出てきたような国際科学オリンピックの金メダルではなく、地区の大会らしい。リンは国際クロスワード大会でも優勝に輝いている。

40）「Teen Genius」で優勝した際に、どうしたらそんな超スピードで割り算して円周率を出せるのかと校長に質問されたバンクは、割り算ではなく暗記ですと答える。幼いころから父親と「暗記ゲーム」をしていて何でも暗記できるようになったという。

パティーモークという、満月と新月の夜に戒律を遵守したかを確認する僧侶の集いで、227か条の戒律を一字一句違えることなく半時間に及んで諳んじることができる僧侶が少なからずいる。このようにタイでは鍛錬によって優れた記憶力を持つ伝統がある。

41）ビュッフェ形式のご飯はタイで近年大流行しており、特にしゃぶしゃぶ食べ放題の店が大人気で街のあちこちにある。本作ではサーモン・ビュッフェなので、店は「Oishi Grand」ではないかと推測される。一時は流行のデートコースの一つとして一世を風靡したチェーン店で、人気の最盛期は映画制作者の青春時代である。当時の物価からすると高めの値段設定で、男性が女性を誘う絶好のスポットだった。本作ではリンから誘っているのが目新しい。タイ社会では、大人の場合だと、誘った方もしくはお金持ちの方がご馳走するのが暗黙の了解となっているので、仮に行った場合はリンが勘定を払うのか、二人で勘定をシェアするのか気になるところである。

バンクは、もったいない、そんな贅沢はしないといってリンの誘いを無下に断る。「倹約家のところがお父さんそっくり、ついでに髪がぼさぼさでシャツがよれよれのところも」とリンはまんざらでもなさそうに加える。自分の尊敬すべき父親とそっくりというのは、タイではかなりの誉め言葉である。リンは、劇中の嘘の証言インタビューでも、「バンクは私のお父さんを除いて一番正直だ。絶対に不正などしていない」と言っている。自分の父親に次いでというのも極上の誉め言葉であり、とくに意中の人に対してはこの上ない口説き文句となる。

２度目のスイートなシーンは、シドニーでオペラハウスを背景に２ショットでセルフィーする場面だ。「明日から世界のどこにいても大丈夫よ」と、リンはまるで駆け落ちもできるようなことを言うが、バンクは無関心ですでに試験の準備モードだ。その後二人で、バンクのスマートフォンから引いたイヤーフォンの片方ずつをそれぞれの耳にして、モーツァルトのアイネ・クライネ・ナハトムジークを聞いている。彼はモーツァルトを聴くのが好きなようだ。モーツァルトを聴くと頭がよくなるという話はタイでも近年一部に浸透していて、普段西洋クラシックなど聞く習慣がないような人でも聞いていたりする。しかし、二人の天才のロマンスは結局かみ合わない。リンがいくらちょっかいをかけても、トラとライオンのように、基本的には生息環境が違い、一緒にいるのが困難で、両雄並び立つことはないのだろう。

4.『バッド・ジーニアス』が描く交差した不平等社会

頭がよく生まれてこなかったのだから、その不利をお金で補ってなにが悪いという趣旨の言葉を聞いて、日本の観客は衝撃を受けるかもしれない。清廉潔白に重きを置く心境とはほど遠い。『バッド・ジーニアス』では、金持ちと貧乏人の格差がくっきりと描かれている。なかにはその不平等社会ぶりに義憤を覚える人もいるかもしれない。パットのような金持ちは何でも手に入る[42]。金でカンニングをして名門ボストン大学留学まで達成しそうだ。可愛い彼女までいる。またパットは、STICカンニング計画のクライアントを募集する大規模セミナーで非凡なプレゼン能力を披露している[43]。頭脳はよくないが、商売のセンスは父親の血を引いて抜群なのかもしれない。

しかしパットにはパットなりの言い分があり、「秀才にはわからない、アホである悩みは」と言っている[44]。富裕層は努力しなくてもお金ですべて解決できて不平等だと非難を受けるが、パットにとっては頭が悪く生まれてきたことが不平等なのである[45]。「自分たちのように悪い頭脳を持って生まれてきたものはそれだけで不公平だ。頭のいい人たちに比べて生まれつき不利な状況の我々が、頭のいい人たちからテストの解答を分けてもらって何が悪い。金のない人が金のある人から助けてもらうのと同じではないか」という論理が働いている。その考えはグレースも同様である。彼女は「どんな手段を使ってでも」とまでは考えていない点は異なるが、「生まれつき有利なものが不利なものを助ける、何か施しを与えるのはあたりまえ」という考えが彼らの思考回路の基底にある[46]。

そうした連中に対して、金持ちは恵まれすぎて勉強する努力さえしないと非難したくなるのは理解できるが、勉強しても分からないのだからその部分には精力を使わず、もっと自分たちにとって得意で生産性のよい分野で励めばいいというのが、彼らの理である。人には向き不向きがあり、生産性の悪いところでいたずらに頑張るのは、体力気力を浪費する

42)パットは校内テストで落第しなければ父親から新車を買ってもらえるとのことで、リンにカンニングを持ち掛け、実際にBMWを買ってもらった。

43)「大学に選ばれるのではなく、大学を選ぶんだ！」というセリフで大勢の聴衆を魅了して、カンニング作戦に引き込んでいる。

44)パットは、カンニング試験中にリンのシャープペンシルの芯がなくなったのを目にして、焦って動転した様子をみせるなど案外小心者の面も持っている。STICで合格点がとれなかったら父にただではすまされない、殺されるかもと、真剣に父親を怖れている。暴行の真相を知り憤慨したバンクに「そんなに父親が怖いなら、また人を遣って（暴漢を雇って）自分の父親を殺ってしまえ」と罵倒された際も、パットは結構こたえている様子だ。タイでは親のことを言われることは最悪の悪口である。

45)一般的にタイでは、今生で貧しいのも頭が悪いのも、またその逆も、前世の業と考える。

46)タイ社会の基本である恵まれた人が恵まれない人を助けるのがあたりまえという考えが、登場人物全員に共通にある。ただし、どんな手段を使ってもいいと正当化する考えをもつのはパットとリンに特徴的である。頭に恵まれないパットは金を使って、金に恵まれないリンは頭を使って、たとえ内容がブラックな手段であってもそれを補うのは当然であると正当化している点で共通点がある。

だけで、結局むだな努力に終わる。精神論、根性論は、ここでは少なくとも通じない[47]。

ところで、本作での対立構図を、リンとバンクの貧困組vsパットとグレースの金持ち組と捉える人がいるが、果たして妥当であろうか。バンクの家庭は間違いなく貧しい家庭だが、リンの家庭はそうとも言えない。父親は教員であり自家用車も所持している。社会的には中流であろう。現在経済的に充足はしていないかもしれないが、決して貧困家庭とは呼べない。また、リンとバンクの負け組vsパットとグレースの勝ち組の構図と考える人がいるが、リンとバンクは「天才」として生まれていて[48]、パットとグレースは経済的に裕福な家に生まれてはいるが先に述べたように本人曰く頭が悪く生まれているので、実際にはどちらが恵まれているのかわからない。もし家業が倒産してしまったら、後者には何も残らなくなってしまう危険性もある。単純な対立構造ではなく、不平等が交差しているタイ社会の姿が描かれている。

5. 自らの意志で行動し決断し闘う タイ映画の新たなヒロイン像の誕生

本作のヒロインであるリンは自分の意志で行動する女性だ。校長に反論し、父親に嘘までついてオーストラリアに行く。最初の転校を除いて、重要な物事の決定権を自分の手中に収めていると言っていい。自分にとって利があると判断すれば、親に何も相談せず、さらには親を裏切ってまでも決めた目標に向けて行動する姿はたくましくも映る。途中、ボストン大学留学を独断で決めさえする。オーストラリア行きでさえ決定後にサインだけもらっているのだから、もしボストン留学が実現したら、親には事後報告するだけだろう。自分がよしとしたことは譲らない。普通の高校生には無理と思われる経済的なことまで自分で決めて行く。既存の権力に服さず、さらには年長者に従順であるというタイ社会の不文律の規範とも一線を画している[49]。

それだけでなく、このヒロインは他人の運命をも自分の手中に握る女である。リンがバンクに気があるのは明白だ。リンに「ちょっかい」をかけられるバンクはつくづく気の毒に映る。思えば最初から、テレビのクイズ番組出場の際にサーモン・ビュッフェに行こうなどとリンに目をつけられてしまったのが、バンクにとっては運の尽きである[50]。言いすぎかもしれないが、うぶでまじめなバンクと百戦錬磨のリンは、ヘビににらまれたカエルのように見えてしまう。あるいは蟻地獄か。気を付けないと地獄に引き込まれてしまう。

本稿の冒頭でバンクの母の立場から見たらリンは「悪女」だと書いたが、リンはバンクを、真綿で首をしめるようにまやかしの論理で承諾に追い込み、悪の道[51]に引き込む。悪の道に誘い込んでおきながら、最後は自分だけさっとそこから身を引いて、父親のような清廉潔白な教師を目指すと宣言し、タイ国内の大学の教育学部受験の面接を受けている[52]。

海外留学はなくなっても国内有数の大学に進学する選択肢があるリンと比べると、高校中退というスティグマを背負って一生を送らねばならぬバンクがますます気の毒に思えてくる。「負け犬」のバンクを捨て置いて、自分はいい大学というセーフティな場所へとリンは避難しようとする[53]。ここで再び、バンクの母が校長を前にして、退学する息子の横で黙っ

47) ただし、タイ社会の貧富の差を擁護するつもりはない。前述のように長年相続税が（固定資産税も）ほとんど機能してこなかった状況では、抜本的改革をしない限り、階級差を縮めるのは難しい。ドラスティックな社会変動は時間がかかる問題だ。自分たちの社会はそれほどの「階級社会」ではないと考えているタイ人もいて、なかにはタイより今の日本の方が階級差が大きいと主張する人もいる。

48) リンやバンクは才能があるからまだいい。才能のない貧乏人はどうしたらよいのか。タイで貧困層から手っ取り早く金持ちになるには、男ならムエタイ・スター、女なら重量挙げオリンピックで金メダルというのが近年のサクセス・ストーリーの典型だ。ある女子重量挙げ選手がインタビューで、「このバーベルを持ち上げれば車が手に入る、これをあげれば家が建つ、と念を入れながら試合で頑張った」と語っていた（タイではオリンピックでメダルをとった者には手厚い報奨金や年金が出される）。また、裕福な相手と結婚することも、他の国同様に貧困から抜け出す伝統的な手段として存在する。

49) ただし、父親に親孝行したいというタイ社会の価値観は本作品でも不動である。

50) バンクが最後にリンをGATやPAT試験の不正に誘ったとき、リンはうんとは言わず、「（お金が）足りないなら私の分もあげるわ」といってバンクの手を握る。

51) パーリ語でいうところの「アバイヤムック」。

52) 面接官が「スクサーサート」（教育学）ではなく「カルサート」（師範学）といっているので、受験大学はチュラーロンコーン大学であろうか。「カルサート」という学部名称は国立の一部の名門大学にしか付けられていない。

53) とはいえ一般的に教育学部の偏差値はそれほど高くないので、面接官の「これほどの優秀な成績なのに奨学金で海外留学しないのはもったいない」といったセリフが出てくる。

て涙をぬぐう姿が思い浮かぶ。バンクの母から見える角度の鏡に映るリンの姿はまぎれもなく「悪女」だろう。何重もの意味で息子を誘惑する悪女といえる。

しかしながら、従来の男性社会がしたように彼女を「小悪魔」や「魔女」として排除しようとしてはいけない。すでに述べたが、黒とダークオレンジのボーダーシャツを着たリンが嘘の証言をする時、画面には合わせ鏡のように何重にもリンの身体が映っている。本当のリンはどこにいるのかと問いかけているようで、リンは様々な可能性に満ちた存在の女性なのだ。たとえリンが男性に生まれてきていたとしても、天才の孤独やゆらぎは同じである。天才ゆえ周りと同じ目線には立てない。よって、リンの存在を「魔女」として封殺し、その可能性の芽を摘み取ってはいけない。

それでは、本映画の「天才」主人公が男性でなく女性である意味は何であろう。男性だと既存権力に対する抵抗として陳腐なものになるためであろうか。制作側に女性のエンパワーメントを奨励する意図が隠されているのであろうか。最初に述べたように、観る側もヒロインにエールを送りたくなる人が多いので、それは成功しているともいえる。それとも頭脳明晰な女性が多いタイ社会の素直な反映であろうか。タイは有名国立大学でも女性の比率が高く、しかも優秀な学生に満ちていることは事実である。

リンというヒロインの存在をめぐって、もう一つ印象深いシーンがある。校内でのカンニングがばれそうになった際、グレースとパットがミッション系である高校の校舎にあるマリア像にお祈りする。そのとき校舎に見えているマリア様の顔がリンの顔に似ていると感じるのは気のせいだろうか。リンはグレースたちにとっては天才であるとともに、救世主、聖女でもあるのだ。

いずれにしても、本作品『バッド・ジーニアス』のヒロインは、タイ映画の中でも独特の立ち位置にいることは間違いない。その毒を持った存在は、「ヒロイン」であると同時にアンチ・ヒーローならぬ「アンチ・ヒロイン」[54]であるともいえる。現代社会の複雑な要因がリンをこのような多面的なキャラクターに仕立て上げたのだろうか。

6.「クレバーさ」を身に着けたバンクの闘いの始まり

初めは戦う気のなかったバンクは、リンによって戦闘モードにされてしまった。すべてを奪われたバンクは、最後にGATやPATでのカンニング作戦をリンに持ち掛ける。リンは既にこうしたことからは足を洗って父のような清廉潔白な教師になると決心していたので、どんなにおどされても受けることはない[55]。「洗濯屋の未来」の看板による陸橋での回心以来[56]、バンクは不正を行うことに前向きになっており、最後に完全に立場が入れ替わった。金持ちにごみ扱いされて、あれだけ虐げられれば、「金は力」と考えるようになってもおかしくはない。

しかし、間違ってはいけない。バンクは金の亡者

54) 最初の頃の校内でのカンニング報酬により通帳の預金の桁が急増していくのを見てほくそ笑む姿は、見方によれば可愛くもあるものの、背筋がぞっとするようにも映る。ここだけ切り取ってみると正義の仮面をかぶった小悪魔だ。すでに悪女の片鱗をみせていたともいえる。また、リンが時折みせる人を小馬鹿にしたような不敵な笑みは、十分にあくの強いアンチ・ヒロインの素質が具わっていることを感じさせてくれる。

55) 最後に父に付き添われてシドニーのSTIC試験で不正をしたことを当局に告白しに行くシーンがあるが（ここでは黒と白色のボーダーシャツを着ているのが興味深い）、リンがすべてを告白したのかはわからない。リンが詳細を語ればグレースたちの取り調べが始まって、真相が判明して関与した全員の点数が無効および今後のSTICの受験資格剥奪となる。そうするとグレースのボストン行きはなくなり、他の生徒も海外の大学進学は絶望的になるし、全員退学となる（これはお金で回避できるかもしれないが）。

リンがそこまで話したとするならば彼女の身も心配になる。暴漢に襲われるかもしれない。それ以上に、リンも退学処分となり、面接を受けていた国内の大学進学もなくなり、父のような教師になる夢も閉ざされる。リンもまたバンクと同じように、今後、高校中退というスティグマを刻まれて残りの長い人生を生きて行かなければならない。そうすると結局バンクの誘いを受けるしか選択肢がなくなり、もとの悪の道に舞い戻ることになる。リンにそこまでする決意があるだろうか。

56) ここで映画の冒頭を思い出してみると、ニュース報道のナレーションが、今回大々的にカンニングが行われたがいまだ真相は不明であると言っていた。これはバンクが捕まって尋問された際の供述に基づくものと思わせていたが、ひょっとすると、リンの告白を受けた結果のニュースかもしれない。そうだとするとリンはカンニング事件の詳細を語っていないことになる。

暴漢の黒幕がパットであることが判明して、金持ちにとっては自分の存在はごみ山を徘徊する犬同然のみすぼらしい存在でしかないことを自覚して打ちひしがれていたとき、「洗濯の未来」と大きな字で書かれた明るく爽やかな女性の姿がある看板が目に入る。看板を見た後、断ったばかりのSTICカンニング計画に協力しない決意を翻して陸橋の上で踵を返して逆方向に歩き始めたところ、彼のあとを追ってきたリンと遭遇する。今の自分には未来はなく、明るい未来を勝ち取るためには金が必要であると、陸橋を渡っている間に「回心」したのである。陸橋にかかる交通表示の「↓」（青色）と「×」（赤色）が彼の伸るか反るかの逡巡とともに、積極的になったバンクと消極的になったリンの立場の逆転を暗示しているといえる。

と化したのではない。この映画のタイトル「チャラート・ゲーム・コーン」にあるように、「ずるいゲーム」を楽しむ「賢さ」を身に着けたのである。それは、リンにはあってバンクにはなかった「賢さ」である。純粋でナイーブ（英語の意味）な少年からチャラート（英語のcleverに相当し、ずる賢いという意味も含む）な大人への変異である。社会の厳しい洗礼を受けて金に目がくらんだのではなく、金儲けをゲームとして、それをクリアするスリルを味わい、楽しむことに気づいたのだ。まじめなだけではこの世間は渡っていけない。「チャラート」でなければ、この塵と埃にまみれた俗世、「ローキヤ」[57] を渡っていけないことに気が付いたのだ。不条理な現実にぶつかり、叩きのめされた彼にとっての人生の闘いが始まるのである。クイズ番組で獲得した賞状をまず父親の遺影のまえにお供えするような高校生だったバンクは、果たしてこれからの人生との闘いにサバイブできるのだろうか。

57）パーリ語。ローキヤの反対は、清浄な出家の世界である出世間のロークッタラ。